卒業

～　Loving You　～

めばえ

ヒロくんといっしょに、たらいにイッパイみずをいれて、ジュースのアキカンうかべたよ。

イッパイ、イッパイ、アキカンをうかべたよ。

たらいのみずに、あおいおそらがうつってた。

そのおそらをアキカンがチャプチャプ。

でもヒロくんは、チコがうかべたアキカンをどんどんしずめちゃうんだもん。

チコはないたよ。ヒロくんがチコにいじわるするから、エーンエーンってないたよ。

そうしたらヒロくん、チコのあたまをナデナデして、いいこいいこしてくれたよね。

ヒロくん、しずめたアキカンを１つ１つ、うかべなおしてくれたよね。

こんどはチコがアキカンをしずめたら、ヒロくんがないて、チコがいいこいいこしてあげたの。

チコとヒロくんはなかよしだもんね。

ずっと、ずっとなかよしだもんね。

チコ、おおきくなったらヒロくんのおよめさんになってあげるね。

チコがきれいなおよめさんになったらヒロくん、うれしい？

まっててね、ヒロくん。

やさしくイジメテ

早く来てよ。

ヒロの大馬鹿。

トンマ。

間抜け。

チコのこと、早く助けに来てよ。

早く来ないと私。

酷い目に遭わされる。

ねえ、早く！

どうして助けに来てくれないの？

チコのこと嫌いなの？

チコはヒロが大好きなのに、どうして来てくれないの？

どうして？

どうしてなの？

やだ・・・

嫌よ。

やめてよ。

そんなこと・・・

やめてーーー！

加藤千恵子（チコ）が登校すると、クラスの男どもが待ち構えていた。

そして、席に着くやいなや、そのうちの１人がニヤニヤしながら千恵子に命令した。

「早くノート出せよ」

千恵子は悲しそうな顔で鞄の中から数学のノートを取り出すと、その男に渡した。

「どれどれ・・・おー、ちゃんと答え出来てるじゃねえか」

昨日出された宿題であった。

周りの男どもも、そのノートを覗き込む。

「俺にも写させろよ」
「俺にも見せろ」
「俺にも」

男どもは千恵子のノートを奪い合うようにして答えを写している。

「しっかし、細けえ字だな。写しづれえよ、まったく」

確かに、千恵子のノートは非常に細かい字でビッシリと隙間無くうめられていた。

「しかも、女のくせに色気のねえノートだよな。普通、女子のノートはマーカーで綺麗に線が引かれてるもんだけど、お前のは黒一色じゃねえか」
「これだから貧乏人は嫌になるよな」
「まったくだ」

その男どもは、ドッと笑った。

それを遠巻きにして、女子生徒達もニヤニヤと笑っていた。

そして千恵子は一言も発せず、ただうつむいて、男どもが答えを写し終わるのを待っていた。

千恵子は、この公立中学の３年生だ。　そして、成績も学年の上位にあった。

しかし、この学校の生徒の中で千恵子の味方をしてくれる者など誰１人として居ない。

誰もが千恵子を嘲りの対象としか見ていないのである。

それは千恵子の家が貧しかったことが原因であった。

この年頃の少年少女は、時として信じられないような残虐性を発揮することがある。

千恵子は貧しいといっても、身なりは清潔にしていたし、心も捩れてはいなかった。　いや、むしろ純粋で純真な心の持ち主であった。

それにも関わらず、同級生達は自分の鬱憤を晴らしたいが為に、千恵子を獲物にしたのだ。

しかし、千恵子の家も生まれた時から貧しかった訳ではない。　ある時を境にして、坂を転げ落ちるように経済状態が悪化したのだ。

そして現在ではお弁当も持ってこれず、昼食を抜く程までになっていた。

同級生達は、そんな千恵子に同情するどころか、まるで汚い物でも見るような目で見ていた。

そして成績の良い千恵子は、都合の良い時だけ利用されていたのだ。

千恵子がこれ程の貧しい生活を送らざるを得ない状態になったのには訳がある。

サラリーマンだった千恵子の父は、千恵子が９歳の時に癌で亡くなっていた。

その時、生命保険も下りたのだが新築したばかりの自宅のローン返済の為に、ほとんど使い切ってしまっていた。

それまで専業主婦だった千恵子の母は、パートに出たが収入が足りず、生活や千恵子の学費を稼ぐために、やむを得ず水商売の世界に足を踏み入れた。

しかし、もともと酒が体に合わなかった母は、体を壊して夜の仕事から足を洗わざるを得なくなったのだ。

それからは、日に２つのパートを掛け持ちして働いていたが、それでもギリギリの状態であった。

しかも、水商売をしていた頃に知り合った男が家に転がり込んで、そのまま居座ってしまったのである。

これまで夫の死や自らの病気など、数々の不幸に襲われて、すっかり気弱になっていた母は、この男に唯一の救いを求めたのだ。

しかし、この柿沼作治という３５歳の男は、千恵子の家に入り込んで間もなく仕事を辞め、今では酒とギャンブルで怠惰な毎日を送るようになっていた。

母がせっかく稼いだお金も、柿沼の酒代とギャンブル代で次々消えていったのである。

だが３９歳の母は、この年下の男の虜にされて、要求される度に、ただただ貢ぎ続けるだけであった。

千恵子は母が好きであったが、最近はまるで他人のように思えることが多かった。

パートの掛け持ちで慢性的に疲れているということもあっただろう。

しかし、惚れた男に飽きられ捨てられることへの恐怖心から、いつしか母の目は千恵子よりも男の方に向けられるようになっていたのである。

寂しかった。

せめて、大好きなヒロが一緒の学校だったら、少しは心も癒されただろうが、ヒロは近くの有名私立中学に入ったのだ。

だから、千恵子は家でも学校でも孤独だった。

その寂しさを埋めるためにも、千恵子は必死になって勉強した。

しかし、授業中でも同級生達のイジメは止まなかった。

先生が板書のため黒板の方を向くと、千恵子の後ろにいる男どもが一斉にゴミを投げつけてきた。

それが頭や体に当たっても千恵子は無抵抗で、されるがままだった。

いじめられる事に慣れっこになっていた。

これが自分の人生なのだと諦めきっていたのだ。

だから、どんなに邪魔をされても授業に集中することに専念していた。

先生の言葉を一言も聞き逃さないように、必死で前を向いていたのだ。

授業が終わると、いつも千恵子は逃げるように教室を後にした。

へたに放課後残っていると、男どもの格好の餌食にされるのだ。

教室にどれだけ人が居ても、誰も助けてはくれない。

スカートめくりなどは日常茶飯事だった。　すれ違いざまに胸を揉まれたり、尻を触られることだってある。

千恵子はそれでも一言も発せずに耐えていた。

悲鳴をあげると、かえって男どもの淫らな欲望に火がつくことを経験で知っていたからだ。

千恵子は急いで校門を出ると、家とは反対の方向へ歩き出した。

これも毎日のことだ。　ヒロ（桜井広義）の通う学校へ向かうのである。

千恵子の中学から徒歩で１０分程のところに、ヒロの中学はあった。

そこは、有名高校への進学率も高く、またスポーツでも全国トップレベルの選手が揃う、いわゆるエリート中学である。

千恵子の学力があれば軽々と入学できたのであるが、経済的な理由で諦めていた。

しかし、学力優秀でスポーツ万能、そして経済的にも恵まれたヒロは、そこに入学したのだ。

千恵子はヒロの学校に到着すると、校内に入る訳にはいかないので、敷地の外から金網ごしにグランドの隅々まで目を凝らした。

駅伝の選手であるヒロはグランドで練習することは少ない。

大抵は部の仲間達と共に近くの河川敷沿いの遊歩道を練習場所として利用していた。

しかし、そこへ向かう前にグランドで数周ウォーミングアップをしてから校外へ出るのを常としていた。

今日もヒロ達は、グランドをゆっくりとしたスピードでジョギングしていた。

やがて体も温まった一行は二列になって校門を走り出て来た。

ヒロ達が河川敷に向かうグランド沿いの道端に千恵子は立っていた。

それはいつもの約束事だった。

ヒロ達を見送る千恵子に向かって、ヒロとその仲間達はいつも満面の笑みで応えてくれた。

千恵子が急いでここに向かったのには、そういう理由もあったのだ。

「ガンバッ！」

千恵子は片手を大きく振りながら、ヒロ達に１人声援を送る。

そしてヒロ達も、手を振りながら千恵子の前を通り過ぎて行く。

その瞬間だけは、普段の辛さも忘れて、本当に幸せな気分になれるのだ。

次第に遠ざかっていく彼らの後姿を見送った後、千恵子は近くのベンチに腰掛けて、再び彼らがここに戻ってくるのを健気に待ち続けていた。

「いい子だな、ヒロ」
「ん？　ああ、チコのことか？」
「お前が羨ましいよ、あんなに一途な彼女が居てさ」
「アホ、彼女なんかじゃねーよ」
「素直じゃねーな」
「ただの幼なじみさ」

河川敷を走りながら、ヒロは仲間達と会話をするのが習慣だった。

駅伝はチーム競技だ。傍から見ると試合中は一見孤独な闘いのように見えるが、実は違う。

１本のタスキがレースを繋ぐと同時に、チーム全員の心まで繋いでいるのだ。

どんなに苦しくても、次の仲間にタスキを繋ぐことだけを考えて必死で走る。

絶対にタスキは途切れさせない。

その心意気が、いつしかチーム全体に伝播して心が一つになるのだ。

だからこそ、チームメイト達は皆、千恵子のことを大切に考えていた。

ヒロが千恵子を大切に思っていることなど、チームの全員がよく分かっていた。

そして、千恵子がヒロのことをどんなに愛しているかまでも、この仲間達は気付いていた。

この素晴らしき仲間達はヒロと千恵子を温かく見守っていたのだ。

「でもチコちゃんとお前が並ぶと笑っちゃうよ」
「何でだよ」
「だって、ヒロは１８０ｃｍだろ？」
「ああ」
「チコちゃんは？」
「チコは確か１５３ｃｍだったかな？」
「ノッポとチビのコンビじゃねえか？」
「悪いか？」
「いえいえ、お似合いでございます」
「くだらねえ事を言ってねえで、ちゃんと前向いて走れよ。コケるぞ」

確かに千恵子は小さいし体の線も細い。　だからヒロは余計に千恵子のことを守ってやりたいような気持ちになるのだ。

ヒロと千恵子の家はごく近い。しかも、その近所には同年代の子供が居なかった。　それで二人は幼い頃からいつも一緒に遊ぶようになったのである。

ヒロにとって千恵子は幼なじみであると同時に妹のような存在でもあったのだ。

同い年だから妹というのは不思議な気もするが、千恵子はいつもヒロのことを頼って、後にくっついていた。

何をするにもヒロが主導権を握り、千恵子はそれに嬉々として従う。　そんな従順な千恵子のことを、いつしか妹のように可愛く思うようになったのである。

当然、同じ中学・高校・大学に進むものだと漠然と考えていた。

しかし、千恵子の家に起きた現実がそれを許さなかった。　もちろん、ヒロは千恵子の家の事情もよく知っていた。

だからこそ、いつも心配していたのである。

ヒロ達は、さらにスピードを上げた。インターバル走の開始である。

一定の距離をハイペースで走り、その後スローダウン、そしてまたハイペースというように繰り返し行うのがインターバル走である。　これは結構キツイ練習であった。

それまで、おしゃべりをする余裕があった仲間達も必死の形相になり、誰も言葉を発するものは居なくなった。

ヒロはそのキツさに絶えながら考えていた。

今度の１１月の大会が俺達３年の引退レースになる。

これまで２位が最高だったが、今年こそは優勝を狙うのだ。

その為には、この苦しい練習に耐えなければならない。

キャプテンの俺が全員を引っ張って、なんとしても成し遂げるのだ。

その時、ふと千恵子の姿が頭に浮かんだ。

チコはまた応援に来てくれるだろうな。　違う学校だから、あいつはいつも遠慮して遠くから見ているだけだったけど、本当は仲間に入りたいんだろうな。

今度の大会ではウチのメンバー達にチコを臨時マネージャーにすることを頼んでみるか。

よし、そうしよう！

突然閃いた良い思い付きにヒロは急にパワーがみなぎるような気がした。　調子がドンドン上向いてくる。　ヒロはグングンとスピードを上げた。

「お、おーい！　ヒロ早すぎだよー」

もう日も暮れかかっていた。

今日の練習メニューを終えたヒロ達は、また元の道を戻ってきた。

一行の姿が遠くに見え始めると、千恵子はベンチから立ち上がり彼らの到着を待っていた。

「チコちゃん、ただいまー」
「おまたせー」
「バテバテだー」

メンバー達はいつものように、出迎える千恵子に対して、それぞれが少しおどけた調子で声をかける。

「みなさーん、お疲れ様でしたー」

千恵子も笑顔で迎える。　この１時間ほどの孤独な待ち時間が一気に報われる瞬間である。

一行はグランドに戻るとクールダウンを行った。

もうすぐ練習は終了だ。

そうすれば・・・。

今日の楽しみは終わってしまう。

永遠に続いて欲しいと願っても無理なことである。　練習は終了した。

千恵子は、ヒロが着替えのために更衣室に向かうのを見届けると、１人そこから立ち去った。

何故って？

ヒロと一緒に帰る姿を同級生に目撃でもされたら、明日どんなイジメに遭うか分からないからだ。

こんなに大好きなヒロと並んで帰ることの出来ない悲しさを、改めてかみしめながら千恵子は家に向かった。

ヒロ・・・。

私達、小さい頃のようには戻れないのかな？

ヒロは昔のままなのに、私だけ変ってしまった。

ううん、私の気持ちは何も変ってないのに、どうしてこうなってしまったの？

お父さんが生きていてくれたら・・・。

家に帰りたくない。

あの男は今日もパチンコ屋にでも行っているだろうか。

家に居ないことを願う。

私が帰った時に、あの男だけが家に居たら、お母さんが帰ってくるまで私も家に入れない。

あの男の目は吐き気がするほど厭らしい。

暴力もふるう。

最低男・・・。

お母さんは、どうしてあんな男がいいの？

私を虐めるあの男。

家でも学校でも、私の居場所なんて無い。

私が逃げ込める場所はヒロとの思い出の中だけ。

私達、小さい頃よくケンカもしたよね。

私の大事なオモチャをヒロが返してくれなくて泣いたり、一緒に遊びに行った時、ヒロが私から隠れて、１人ぼっちにされた私は心細くなって泣いたり。

結構ヒロもイジメっ子だったよね。

でも最後はいつも仲直りしてた。

やさしいイジメっ子がヒロだった。

あの頃に戻りたい。

仲間

助けて・・・。

ヒロ。

お母さん。

お父さん。

誰か助けて。

やめて。

お願い。

もう堪忍して。

そんなことしないで。

嫌だ。

もう嫌・・・。

待ちに待った駅伝大会の日が来た。

晴れてチームの一員となった千恵子は、朝から落ち着かなくて緊張の連続だった。

千恵子の役割は、走り切ってタスキをつなぎ終えた選手にドリンクとタオルを渡すことだった。

コースは市の運動公園の中の遊歩道を使って行われる。　１周３キロのコースを１０人のメンバーがそれぞれ２周ずつ走ってリレーする方式であった。

第１走者は既にウォーミングアップも終わりスタートの時を待っていた。

第２走者以降の選手達も自分のスタート予測時刻に合わせて、思い思いにウォーミングアップを開始していた。

最終走者であるヒロは、先程からウォーミングアップを開始した。

千恵子はヒロのウォーミングアップを見守りたい気持ちでイッパイだったが、他のメンバーの面倒も見なくてはならず、気が気ではなかった。

「頑張ってね」
「おう！　任せておけってチコちゃん」

そう気丈に振舞う第１走者の彼も、少し緊張していた。

「それでは、位置に付いて！」

審判員が叫んだ。　各校の第１走者達がスタートラインに並んだ。

パーン！

ピストルの音と共に、全選手が弾かれた様に飛び出した。

「ガンバー！」

誰よりも真っ先に、千恵子は精一杯の大きな声で叫んだ。　そして周りにいた他校の関係者達も、それに負けじと応援を開始した。

我がチームの第１走者は非常に良いスタートを切って現在は３番手に付けている。

しかし、そのすぐ後ろには４人の集団が迫っていて、決して予断を許さない状況だった。

やがてスタート地点からは見えない林の陰に吸い込まれていった。

彼らが再びその姿を現した時には、トップが５０ｍ以上も２位以下を引き離していた。　我が方は変らず３位である。しかし、これ以上離されると後がキツイ。

「頑張ってー！」

千恵子は祈るような気持ちで声援を送った。

しかし、そのままの３位でタスキは第２走者に渡った。

その後、次々とタスキリレーがされたが、順位は変ることがなかった。

次はいよいよ最終走者、ヒロの出番である。　ヒロの顔には、はっきりと緊張が表れていた。

「ヒロ、大丈夫？」
「チコ、応援していてくれよ」
「うん、私、死ぬ気で応援する」

第９走者が走り込んで来た。そしてヒロにタスキが渡る。

「お疲れ！」
「頼む、ヒロ！」

今やチーム全員の願いはヒロの走りにかかっている。

千恵子はもう、居ても立ってもいられなかった。　林の陰から出てくるポイントに先回りして待ち受ける。

見えた。ヒロは２番手に上がっている。

「ヒーローッ！」

辺りに千恵子の絶叫が響き渡る。

ヒロはチラッと千恵子の方を向いて、微かに笑って見せた。

ヒロの力走に、千恵子は体が震えていた。

とうとうラスト周回に入った。　あと３キロでゴールである。　トップとヒロとの差はまだ４０ｍある。

「お願い、神様」

千恵子は必死で祈った。

チームメイト達は声を限りに叫んでいる。

「ヒロー！」
「行け行けー！」
「ラストだ、ヒロ！」

どの顔も真剣だ。

しかし、ヒロは前半のオーバーペースがたたって苦しそうな表情だ。

「無理か・・・」

誰かが呟いた。

「そんなことないもん。ヒロはまだまだ頑張れるもん」

千恵子の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちた。

「そ、そうだよな」
「そうだ、そうだ」
「よし、もっと応援しようぜ」

一度は気落ちした仲間達も、気を取り直して応援を再開した。

千恵子もコースを先回りしてヒロに声をかけ続ける。

「ヒロ、もう少しよ。あとチョットだよ。だから頑張って！」

苦しそうなヒロだったが千恵子の声に頷いた。

ヒロの息が荒い。

顔は苦痛に歪んでいる。

しかし、

どこにこんな力が残っていたのだろう。

ヒロは猛然とラストスパートをかけた。

トップを行く選手も必死のラストスパートをしているのだ。

若干距離が詰まったように見えたが、そのまま林の陰に消えていった。

そして、再び姿を現した時にはその差は５ｍにまで縮まっていた。

「・・・・・・」

千恵子は絶句した。

この執念、この頑張り、ヒロはやっぱり・・・。

やっぱり最高だ！

もはや成り行きを見守るしかなかった。

もうヒロの耳には何も聞こえまい。　それほど必死の激走をしているのだ。

千恵子は祈った。

最終走者の最後の周回だけはコースが途中で変わる。

遊歩道の途中からグランドに入ってきて、最後は陸上トラックを半周してゴールするのである。

そしてトラックに入った時には、トップとヒロとの差はほとんど無くなっていた。

あと１００ｍ、８０ｍ、５０、３０・・・。

もうその様子を見ていられなかった。　千恵子は思わず目をつぶった。

「やったー！」
「すげーぞヒロ！」
「優勝だー！」

その声に千恵子は体中の力が一気に抜けて、その場にヘタリ込んだ。

しかし、ゴールを見るとヒロがコース上に倒れ込んでいる。　最後までトップを争っていた選手も同様だ。

千恵子は起き上がるとヒロの元に駆け寄った。

「ヒロ、おめでとう！」

涙が溢れた。

ヒロに抱きついて千恵子はワンワン泣いた。

「お、おまえ・・・」

ヒロが息も絶え絶えの中からやっと言葉をしぼり出した。

「な、に、ヒック」

「ワンワン泣くなよ。カッコ悪いだろ」

「ヒロのバカー！」

千恵子は余計に激しく泣き出した。

集まったチームメイトも他校の選手達も、そして審判員達までもが二人の様子を微笑みながら見守っていた。

こうしてヒロの引退レースは見事に優勝で幕を閉じたのである。

「それじゃ俺達は先に帰るよ。あとは二人でごゆっくりどーぞ」

着替えが終わったチームメイト達がヒロと千恵子に声をかけて去って行った。

ヒロは相変わらずグスグス泣いている千恵子に掛かりっきりになっていたのである。

「お、おい、お前ら・・・まったく、気を利かせたつもりか」

ヒロは泣いている千恵子の頭を撫でながら、ふと昔を思い出していた。

そう言えば、小さい頃にもこんなシーンがあったっけ。

こいつは昔から泣き虫だったもんな・・・。

でも泣き止むと、また俺の後にくっついて、どこへだって付いてきてたよな。

何だか昔にかえったような気持ちだ。懐かしくて、温かくて、不思議な気持ちだよ。

でも、今日のチコの張り切りようは大変なものだったな。

俺だけじゃなく、チームのみんなの為に一生懸命に頑張ってくれたな。

どっちかって言うと人見知りのこいつが、俺達のために走り回ってくれたんだ。

ありがとう、チコ。　お前はもう立派に俺達の仲間だよ。　これからもよろしく。

「帰ろうか」
「・・・・・・」

千恵子は無言で頷いた。

苦渋の選択

ああ・・・。

私が壊されていく。

どうして。

私だけ・・・。

誰か助けて。

私がこれ以上、変になる前に。

もう・・・やめて。

お願いだから。

受験生にとっては、いよいよ正念場を迎える時期になった。

間もなく受験高校の願書提出である。

既に決めている者、迷っている者と様々だがヒロは進学校の私立青葉台高校に決めていた。

「ヒロ・・・ちょっと気になる噂を耳にしたんだけど、お前知ってる？」

ある日、親友の柏原が妙なことを言い出した。

「公立に行った俺の従兄弟が言うんだよ。チコちゃんが・・・」

「チコがどうした？」

「向こうの学校でイジメに遭ってるらしい」

「なに、ホントか？」

「俺の従兄弟は中１だから状況がよく分からないみたいだけど、何度かチコちゃんが同級生からイジメらしきものを受けてるのを目撃したそうだ」

「イジメを受けてるのはホントにチコなのか？」

「どうも人違いじゃなさそうだよ。この間の駅伝大会、従兄弟も応援に来てたんだけど、チコちゃんを見て驚いたらしい」

「マジか・・・」

「ヒロ、俺達がどうにかしてやれないかな？」

本当に千恵子がイジメに遭っているとしたら、何とかしなければならないが・・・。

一体、何が出来る？

違う学校なのに・・・。

「チコ！」

「ヒロ？」

校門を出たところで突然千恵子はヒロに呼び止められた。

「どうして、ここに？」

「ちょっと聞きたいことがあるんだ」

「ここじゃ困る・・・」

「それじゃ、一緒に帰りながら話そう」

「それも・・・困る」

「俺と一緒のとこを誰かに見られたくないって訳か？」

千恵子は黙って頷いた。

「それじゃ、３０分後に俺の家に来いよ」

「行っていいの？」

「当たり前だろ。昔はよく俺の家にも来てたじゃないか」

「受験勉強の邪魔になるんじゃないかな、私」

「そんな心配は無用だ。今更焦って勉強する必要はないからな」

確かに、ヒロも千恵子も学力には何の問題もないから、今すぐ入試を受けたとしても楽勝なのだ。

「それじゃ、待ってるからな」

そう言ってヒロは先に歩き出した。千恵子の心は躍った。

ヒロが部活を引退してからは、日課だったヒロの応援も無くなったので、ヒロに会うのは数週間

ぶりであった。

千恵子は、毎日学校が終わると市の図書館に行って夜までの時間を過ごしていた。

家にも帰れない、学校にも残れない千恵子にとって、今やこの図書館だけが安息の場所だった。

受験に向けて知識の整理をしたり、棚の本を読んだりして、誰に気を遣う必要も無いここでの時間は貴重だった。

だが、ヒロの家となれば話は別である。

千恵子はヒロとの距離が十分とれた頃を見計らってヒロの家を目指して歩き出した。

ヒロの家の玄関前に着いた千恵子は、チャイムのボタンを押すのをためらっていた。

ヒロの家を訪れるのは中学になって初めてであった。

お互い思春期となって、子供の頃のように気安く行き来が出来なかったというのもあるが、それ以上に貧しさのドン底に居る自分が裕福なヒロの家に行くことで、より一層ミジメさや悲しさを倍増させることを恐れていたのだった。

しかし、心の奥底ではヒロやヒロの両親の温かさに無性に触れたいという気持ちも強く持っていたのである。

今や、自分の家では得ることのできない家庭の温もりが、ヒロの家には確かにある。

千恵子の心は葛藤と闘っていた。

このチャイムを押せば、ヒロのお母さんが私をやさしく迎え入れてくれるだろう。　幼かった日のように。

そして、自分の家との余りにも大きな違いを目の当たりにするだろう。

今の自分にとって、幸せな家庭像を見ることは、帰宅した後の悪夢をより強烈にさせる結果にしかならない・・・。

その時である。

「あら？　チコちゃんじゃない？」

庭の方から声がかかった。

「まあ、やっぱりチコちゃんだ。久しぶりね。ヒロの所に来たのね」

ヒロの母親だった。昔と変らない優しい笑顔で千恵子の方に歩いてきた。

「おばさん、お久しぶりです」

「嬉しいわ、またチコちゃんがウチに遊びにきてくれるなんて。ちょっと待ってね。すぐヒロを呼ぶから」

ヒロの母親は玄関を開けると二階に向かって呼びかけた。

「ヒロー、チコちゃんが来てるわよ。早く降りて来なさーい」

この呼びかけも昔と何も変らなかった。

ヒロは千恵子を二階の勉強部屋へ案内した。

間もなくヒロの母親がショートケーキと紅茶を運んできた。

「チコちゃん。本当に久しぶりね。ゆっくりしていってね」

「は、はい。ありがとうございます」

ショートケーキなんて久しぶりだった。　昼食抜きの千恵子のお腹がグーッと鳴った。

「おまえ、お昼ちゃんと食べてんのか？」

「ダイエット・・・」

「バカ、ちゃんと食え」

ショートケーキをスプーンで口に運んだ。　生クリームがトロけて口中に拡がる。　夢心地だった。

ヒロはスプーンなど使わずに手で掴むと３口くらいで平らげてしまった。

しかし、千恵子はこの貴重なスイーツをゆっくりと味わっていた。

千恵子が食べ終わるのを待って、ヒロが口を開いた。

「おまえ、学校で何かなかったか？」

「えっ？」

「友達と上手くやっているのか？」

「う、うん」

「嘘つけ！」

とうとうヒロに知られてしまった。　千恵子は気持ちが一気に沈んでいった。

「何されたんだ？」

「別に・・・」

「おまえがイジメられてるのを見た奴がいるんだよ。俺はもう頭にきてるんだ。お前の学校に乗り込んで行って、おまえをイジメてる奴らをブッ飛ばしてやる！」

「いや・・・やめて。お願いだから、そんな事しないで」

「だって、おまえがそんな目に遭わされて、俺が黙って見ていられると思うのかよ」

もちろん千恵子には分かっていた。

子供の頃からそうだったのだ。　千恵子が誰かにイジメられると、必ずヒロは仕返しに行った。

相手が年上だろうが構わずケンカして、結局返り討ちに遭うことも度々であったが、それでもヒロは千恵子をいつも守ってくれたのだ。

「今は、少し落ち着いているの。ホントよ」

確かにそれは事実であった。　いつも千恵子をイジメる連中は、ほとんどが勉強など出来ないので、受験を直前にして焦りまくっていたのだ。　千恵子のことなど構っている余裕が全く無くなっていたのである。

ほとんどの同級生達が受験勉強で四苦八苦している中、普段から着実に勉強を続けていた千恵子だけは、今の状況に安堵していた。

少なくても入試が終わるまではイジメも少なくて済むであろう。

だが、おそらく同級生の何人かは自分と同じ公立高校に進むだろう。

ヒロと同じ青葉台高校に行けたら・・・。

青葉台高校に進学できる学力を持っているのは同じクラスの中では千恵子くらいのものである。

担任の先生も千恵子のレベルを知っているので熱心に青葉台の受験を勧めてくれた。

しかし、家の経済状態を考えると、それは到底無理な相談であった。

「おまえのことは俺が必ず守ってやる」

「ヒロ・・・」

千恵子の頬を熱い涙がつたい落ちた。

その言葉だけでもう十分であった。

別々の中学に通い、そして高校も別々になる。いくらヒロが頑張ってくれても限界があるのだ。

ヒロに無理をさせてはいけない。

千恵子はヒロに感謝しつつも、今後決してヒロに弱音を吐かないことをこの時心に誓った。

その夜のこと、ヒロは両親の前で神妙な顔つきで話し始めた。

「父さん、母さん、ちょっと進路のことで相談があるんだ・・・」

入試の日が来た。

何も特別なことをする訳じゃない。いつもの模擬テストと同じようにやればいいんだ。千恵子は自分に言い聞かせた。

試験が始まり、千恵子は普段通りに冷静に答案を仕上げていった。

どの教科もほぼ満足の出来であった。

そして全ての試験スケジュールが終わり、高校の校門を出た時だった。

「チコ！」

振り向くとヒロが千恵子を追いかけて校舎から走ってきた。

「ヒロ・・・どうしてここに居るの？」

「へへッ、俺もここに入ることに決めたんだ」

「な、何で・・・」

「おまえと同じ学校に通いたいからさ」

千恵子の顔がみるみる青ざめていった。

千恵子はこの瞬間に悟ってしまったのだ。ヒロが千恵子のために志望校を変更したことを。

「バカ、ヒロのバカ」

千恵子はそこから逃げるように走り出した。

「お、おい、チコ！」

ヒロは驚いて、すぐに千恵子の後を追った。

千恵子は自分を呪っていた。自分のせいでヒロの人生を変えてしまったのだ。

ヒロにだけは迷惑をかけたくなかったのに。

千恵子は泣きながら走り続けた。

「おい、待てよ。待てったら」

やっと追いついたヒロは千恵子の腕を掴んで引き止めた。

「何だよ。何で逃げるんだよ、チコ」

千恵子は振り返ると、泣きながらヒロの胸を何度も叩いた。

「バカ、バカ、バカ」

「チコ・・・」

「青葉台に・・・行けたのに・・・せっかく・・・あんな良い学校に行けたのに・・・」

「チコ、俺はおまえを守りたいんだ」

「余計なお世話よ・・・私なんかのために、どうしてこんなこと・・・」

「どこの学校に進学しようと、俺のやりたい事が変るわけじゃない。それにここだって進学校じゃないか」

「青葉台とは格が違うじゃない・・・向こうは名門校なのよ」

「そんなの関係ないよ」

「友達だって、みんな青葉台に行くんでしょ？」

「学校が分かれても友達は友達さ」

「おじさんやおばさんが可哀想よ」

「ウチの親は俺の考えを尊重してくれた。大切な人を守るのは当然だって言ってくれたよ」

「私のせいで・・・」

「違う、俺が勝手に決めたことだ。また昔のように戻りたかっただけだ」

「昔のように？」

「そうだ、昔のように俺達はいつも一緒だ」

「ヒロ・・・」

千恵子はヒロの胸に顔を押し付けた。

申し訳なさを感じると同時に、素直な感情が胸に拡がっていった。

「ありがとう、ヒロ」

一週間後の週末に合格発表があった。

千恵子はヒロと二人で発表を見に行った。

もちろん千恵子もヒロも合格である。二人は顔を見合わせ、手を取り合って笑顔で嬉しさを分かち合った。

その帰りに、千恵子はヒロの家に誘われた。

ヒロの家の応接間には既にご馳走が並べられていた。

「チコちゃん、ヒロ、合格おめでとう」

ヒロの母親が二人のために用意していてくれたのだ。

「おばさん・・・」

千恵子はまた大粒の涙をポロポロこぼした。

「あらあら、泣いちゃおかしいわよ。今日はおめでたい日なんだから」

こんな幸せがあって良いのだろうか。　千恵子はまだ信じられない気持ちだった。

それから３人で合格祝いのパーティーをした。　ヒロの父親は残念ながら仕事で欠席だったが、その父親からヒロと千恵子にプレゼントが用意されていた。

それは、男女お揃いの腕時計であった。

「こんな高価なものを」

「いいのよ、チコちゃんは私達にとって娘みたいなものなんだから。使ってちょうだいね」

「おばさん、ありがとうございます。おじさんにもお礼を言わなきゃ」

「しかし、これじゃ俺達新婚さんみたいだな」

「まあ、この子ったら」

ヒロもヒロの母親も、屈託無く笑った。　そして、千恵子もヒロの家族の思いやりが胸にジーンと沁みて、心から幸せを味わっていた。

そして、これからはヒロといつも一緒なのだ。

これが何ものにも代えられない幸せであった。

翌週からの千恵子に対するイジメは酷いものであった。

イジメっ子達は、全員が一次志望の高校を落ちていた。

また、千恵子と同じ高校を受験した同級生は１２人いたが、そのうち合格したのは３人だけであった。

その不合格者達は、これまでにも増して千恵子に辛く当たって鬱憤を晴らそうとしているようだった。

だが、千恵子はそれにも堪えられた。

何故なら、もうすぐヒロと一緒の高校生活が始まるからだった。

それを思えば、どんなことにも堪えられる気分であった。

やがて中学卒業の日がやってきた。

千恵子はこの中学には何も良い思い出がなかったが、ヒロや駅伝チームの仲間との交流、そして最後にヒロとの繋がりが復活したことで、自分にとっての中学時代が有意義であったことを感じていた。

卒業式が終わり、校舎を出ると、校門の所にヒロが迎えに来ていた。

千恵子は、今日だけは誰にも遠慮することなく、ヒロと並んで中学を後にした。

幸せの方角

ああ・・・。

いや！

ああ・・・。

だ、ダメ・・・。

もうダメ。

ああ・・・。

もう・・・堪えられない・・・。

私、もう・・・。

ダメ・・・。

桜が咲き乱れていた。

春。

千恵子は、爽やかな朝の空気を胸一杯に吸い込んだ。

今日から新しい生活が始まるのだ。

真新しい制服に身を包んだ我が身をショーウィンドウに映してみる。

中学時代のセーラー服が野暮ったく感じる。

今日からはこの紺のブレザーとチェックのミニスカートが千恵子の制服になったのだ。

心が弾んだ。

そして、

隣にはヒロが居る。

その横顔を盗み見ていると、ヒロもすぐ気付いて笑顔で応えてくれた。

ヒロと並んで高校への道を歩く。

それだけのことが、千恵子の心に幸せの輪を拡げていった。

やがて、高校の校門が見えてきた。

二人は足取りも軽く、その中へと進んだ。

盛大な入学式も終わり、皆は指示に従って教室に向かった。

千恵子とヒロは同じクラスであった。千恵子はもう嬉しくて堪らなかった。

だが、ひとつだけ憂鬱なのは、中学の同級生だった浜村和男も同じクラスになったことだ。

浜村は、中学時代にイジメられている千恵子を助けるどころか、周りでニヤニヤしながら見ているうちの一人だったのだ。

二度と顔も見たくない男であるが、こうなってしまったら仕方がない。

まあ、ヒロと一緒のクラスになれたのだから我慢しよう。そう決心した。

Ａ組の教室に入り、担任の飯野先生の指示で席に着く。

千恵子は廊下側の前から２番目の席であった。

ヒロはと見ると、真ん中の列の一番後ろである。

千恵子と目が合い、ヒロは軽く片手を振って笑った。千恵子は嬉しかったが、他の同級生達の手前、大袈裟な反応もできず、早々に前を向いた。

この高校は、この辺りでも少しは名の知れた進学校である。

青葉台高校に比べると格は落ちると千恵子は思っているが、それでも難関には違いない。

聞くところによると、クラスの編成は入試の時の成績によってＡ組から順にＦ組まで分けられたそうである。

つまり、千恵子とヒロはトップのクラスに入ったという訳である。

オリエンテーションで高校生活についてのレクチャーが行われた。

皆、少し緊張ぎみだ。

だが、この緊張は心地よい。新しい生活がいよいよスタートしたのだ。

千恵子は奨学生の試験にも最優秀の成績で合格していた。これで高校３年間の授業料の心配は無くなったのだ。

だが、千恵子の家の経済状態は中学の頃と何も変ってはいなかった。

高校の制服代や教科書代は母親が何とか工面してくれた。しかし相変わらず昼食を取ることは出来なかったのである。

３日目の昼休みに入った時だった。

「これ・・・」

ヒロがお弁当の包みを千恵子にそっと手渡した。

「えっ？」

それは、赤地に白の水玉模様の弁当袋だった。中を見ると薄いピンク色の可愛い弁当箱が入っていた。

「これって？」

「シーッ！　ウチのオフクロがお前にって」

「うそ・・・」

やさしいヒロの母親の顔が目に浮かんだ。千恵子は目頭が熱くなった。

ヒロは、同じ高校に通い始めてすぐ、千恵子の本当の窮状を察していた。

昼休みになると千恵子が姿をくらますのにヒロは気付いていたのだ。

千恵子は、弁当も用意できない程に貧しい自分をヒロに見られたくない一心だったのだが、やはり本心ではヒロと一緒に昼食が摂れたらどんなにいいだろうと思っていた。

そして、ヒロは千恵子の窮状を何とか救いたい一心で母親に千恵子の分の弁当も頼んでいた。

もちろん千恵子のことを娘のように思っていた母親に異論のあろう筈が無い。

嬉々として千恵子の弁当作りを引き受けてくれたのである。

ヒロの母親が千恵子の為に作ってくれた弁当は本当に美味しかった。

ただ１つだけ残念だったのは、ヒロがクラスの男友達と一緒に弁当を食べることであった。

ヒロと向かい合って一緒に昼食を摂る。そんな淡い希望は残念ながら叶わなかったのである。

放課後、ヒロが千恵子に声をかけた。

「ちょっと、俺に付き合わない？」

「うん、いいよ」

行った先は陸上部の部室だった。ヒロはそこに居た先輩らしき男に向かって声をかけた。

「失礼します。今度入学しました桜井広義といいます。こちらの駅伝チームに入りたいと思って来たのですが・・・」

「えっ、お前が桜井か。監督から聞いてたよ。まさか陸上連盟が大注目のお前がウチに来てくれるとは思わなかったぜ。てっきり青葉台に行くと思ってたから」

「これから、よろしくお願いします！」

「こっちこそ、よろしくな。俺は駅伝チーム主将の江藤だ。一緒に頑張ろうぜ。ところで後ろのカワイ子ちゃんは誰だ？　お前の彼女か？」

千恵子は突然のフリに驚いて思わず、

「わ、私、加藤千恵子です。マ、マネージャーやります！」

言ってしまった・・・。

ヒロを見るとニヤニヤしている。完全にヒロの計略に引っかかったらしかった。

と言うか、元々ヒロと同じクラブに入るつもりであったのだが。

まあ、想定外の突然のマネージャー就任であったが、これでまた１つ千恵子の夢が叶ったのだ。

もう１つ、念願だったアルバイトも決めた。

ほぼ毎日、クラブが終わった後に高校の近くのハンバーガーショップで働くのだ。

チーム遠征の時などに旅費がかかるが、それを稼ぐ為というのが表向きの理由であった。

もちろんそれは本当であるが、もう１つの理由は、あの男、母のヒモである柿沼が居座る家に帰るのを出来るだけ遅らせたいからだった。

千恵子がバイトを終えて帰る頃には確実に母も帰宅している。夜、柿沼と２人だけで家に居るのは避けたかったのだ。

もっとも、このショップの店長の男も眼つきが少し厭らしいのが気になるのであるが・・・。

しかし、同じバイト仲間には先輩の女子高生達が居たので、むしろ職場は楽しかった。

中学時代には女子の中でも孤立していた千恵子にとって、久しぶりの女友達との会話は楽しく、バイトの時間はアッと言う間に過ぎるのであった。

家に帰るのは気が進まないが、それ以外においては概ね順調な高校生活の滑り出しであった。

だが、１つ気になることもあった。

意外にヒロは女子に人気があるのである。

教室でも、女子達は積極的にヒロに近づいて行って取り巻きを作り、なかなか千恵子の近づくチャンスがない。

「ヒロったら、デレデレしちゃって、みっともないんだから・・・」

クラブの練習の合い間に膨れっ面でヒロに恨み言を言う千恵子に、ただヒロはいたずらっぽい笑顔を返すのであった。

新しい環境に適応していく中で、千恵子は次第に変り始めていた。

今までの環境が、あまりにも救いの少ないものであっただけに、この新しい生活は千恵子の心を弾ませていた。

中学時代、自分のことを小さくて汚らしい存在のように考えていた千恵子であったが、クラブやバイト先の仲間達とのふれあいが、自分の存在を肯定しうる材料となっていったのである。

また、それまで人見知りの性格から、あまり他人との接触を好まなかった千恵子であったが、クラブのマネージャーという大役をこなすには、そんな事を言ってはいられなかったのだ。

クラブのメンバー達の世話をするうちに、仲間達との信頼関係が築かれ、彼らに頼られるようになる。そしてそれに少しずつ悦びを感じられるようになっていった。

そんな内面の変化は、千恵子の外見にも少しずつ影響を与えていった。

だんだん表情も豊かになり、大人の女の匂いが微かではあるが現れ始めていた。

そんなある日のこと、千恵子がグランドに向かおうと、上履きからスニーカーに履き替えようとして下駄箱を覗き込んだ時に、スニーカーの上にのっている手紙に気づいたのだ。

何？　この手紙・・・。

突然のことに、千恵子は面食らった。

不思議な気持ちで手紙の封を切った。

『これを読んだら、すぐに校舎裏の大銀杏の木の下に来てくれ。話したいことがある。』

差出人の名前は無い。

文面も随分と横柄に感じられた。

悪戯だろうか？

無視をすれば良いのだろうが、何となく気になってしまう。

それは、もしかするとヒロかもしれないという淡い期待があったからである。

いくら純情な千恵子であっても、これがラブレターの一種であることは分かっていた。

そうであれば、やはりそれはヒロからの物であって欲しい。そういう女心である。

練習が始まるまでは、まだ少し時間がある。とにかく行ってみることにした。

校舎の裏に出ると、遠くからでも大銀杏の木は眺めることが出来る。

しかし、その周りには人影は無いようだった。

千恵子はゆっくりと大銀杏に近づいた。

誰かが居る！

木の反対側に少しだけ影が見える。

千恵子は心臓のときめきを抑えながら、その影の主を確かめるために、木の陰に回り込んだ。

すると、そこに居たのは予想外の人物であった。

「意外に早かったな」

そこに居たのは浜村和男だった。

千恵子が今、校内で一番嫌いな男である。落胆で思わず視線が足元に落ちた。

「なんだよ、そんな恥ずかしがることないだろ」

全く無神経な男である。

「こうして急いで俺に会いに来たっていうことは、お前もまんざらじゃないって訳だよな」

本当に図々しいにも程がある。大体、差出人が書かれていないのだから、相手が浜村であると気付く筈がないのにである。

「何の用なの？」

「全くお前も無神経な女だな。お互い高校生になったし、そろそろ大人の付き合いをしても良い頃だと思ってな」

「は？」

「俺がお前と付き合ってやるって言ってんだよ」

「そんな・・・」

浜村はニヤけた顔で千恵子の顔色を窺っている。

千恵子は寒気がした。ここまで自分勝手な思い込み男が、よりによって自分をターゲットにしていた事を知ったからだ。

「お前、最近は随分と熱心に陸上部の世話を焼いてるみたいじゃないか。そんな事したって面白くも何ともないだろ？」

「・・・・・・」

「そんなクラブ、さっさと辞めて、俺の家に来いよ。お前のような貧乏娘でも、俺が面倒見てやるからさ」

浜村は厭らしい視線を千恵子の体に向けた。

「お断りします・・・」

「えっ？」

「お断りします！」

「な、何？　お前、自分が何言ってるのか分かってんのか？」

「私、あなたとお付き合いするつもりはありません」

「てめぇ・・・」

浜村の顔がみるみる真っ赤になっていった。

「ふざけんじゃねぇ。テメエなんて俺様にフラレたら一生男に縁がない女だぞ。それでもそんな馬鹿な事を言うのか」

「何を言われても、私の気持ちは変りません」

「てめぇ・・・よくも俺にこんな恥をかかせてくれたな。貧乏人のくせに・・・」

「悪いけど、練習に遅れちゃうから私行きます」

千恵子は、浜村の側を離れた。

「覚えてろ！　このままで済むと思うなよ！」

千恵子はその言葉を完全に無視して歩き続けた。

しかし内心は不安であった。これがきっかけとなって、また中学時代のようなイジメが再開されるのではないか。そう考えると憂鬱だった。

だが、浜村のような男と付き合うくらいなら、まだイジメの方がマシだった。

今までも嫌いだったが、今日の浜村の言い草を聞いて、心底から毛嫌いする対象となったのだ。

それに、何をされても千恵子にはヒロが付いているのである。

ヒロさえ居てくれたら、どんなことだって堪えられるに違いないと思っていた。

その日の練習が終了してグランドから戻り、下駄箱に近づくと、そこには千恵子の上履きは無かった。

やっぱり・・・。

想像していたとおり、イジメが再開されたのだ。

千恵子がしばらくの間、途方にくれているとヒロがグランドから戻ってきた。

「そんなとこで何やってんだよ、チコ」

「上履きが・・・」

「ん？　上履きがどうしたんだ？」

「無くなってる・・・」

「何だって？　誰だ、そんなガキのような悪戯する奴は」

「どうしよう・・・新しいの買えないし」

そのうち陸上部の面々がグランドから次々と引き上げてきた。

「マネージャー、そんなとこで何やってんだ？」

先輩の問いかけに、ヒロが代わって事情を説明した。

「よし、それじゃみんなで手分けして探そうぜ」

キャプテンがみんなに手際よく指示を出し、全員が散っていった。

間もなく、

「あったぞー！」

２年生の先輩が千恵子の上履きを見つけてきた。

「校舎裏の草薮に捨てられてたよ。全く誰だよ」

「ありがとうございました、先輩・・・」

「いいの、いいの。気にするなって」

こうして、何とか事なきを得た。

犯人は浜村に間違いないが、いかんせん証拠が無いので千恵子はその名前を出さなかった。

しかし、翌日もまた同じ事が繰り返されたのだ。

今度はゴミ箱の中から出てきた。

千恵子も落胆したが、クラブの仲間達は怒り狂った。

「マネージャー、誰か心当たりは無いのか？」

「・・・・・・」

キャプテンに聞かれて、よほど浜村の事を話そうかとも思ったが、かえって浜村を刺激してイジメが悪化するのは目に見えていた。

しかし、３日目の放課後の事である。　千恵子達はいつものようにグランドに居た。

すると、

「おらー！　さっさと歩かんか！」

大きな怒声に驚いて振り向くと、３年生の先輩達数人に引きずられて浜村が千恵子達の方に向かってくる。

「犯人捕まえたぞ！」

「おお！　やったか」

浜村を引きずってきた先輩の１人と、キャプテンが勝ち誇った顔をしている。

「いやね、この岡田は俺の親友で柔道部の猛者なんだが、今日下駄箱の監視を頼んだんだよ」

「そういうこと。俺らが隠れて監視してたらこの野郎がノコノコと現れて下駄箱から上履きを持ち出したんだ。後をつけたら焼却炉の中にその上履きを捨てやがったからフン捕まえて連れてきたって訳さ」

浜村は先輩達に力ずくで千恵子の前に土下座させられた。

「おらー、何か言うことがあるだろ？」

「モゴモゴ・・・」

「あー？　聞こえねえんだよ。もっと大きな声で話せよ！」

「ごめんなさーい」

「てめえ、ふざけんじゃねーぞ。ヤキ入れられてえのか？」

「ごめんなさーい、ごめんなさーい、ごめんなさーい」

岡田達に組み敷かれた浜村は惨めな姿で震えていた。

よく見ると、唇の端が切れて血が滲んでいる。　どうやら岡田達に殴られたようである。

中学時代は成績優秀でプライドも高かった浜村だが、おそらくこれが人生最初の挫折であったのだろう。

そして、よほど先輩達が怖かったのであろう。

それ以来、浜村は２度と千恵子にチョッカイを出すことはなかった。

もう何も考えない。

ああ・・・。

考えたくない・・・。

ああ、

ああ、

ああ・・・。

これが私の運命・・・。

ああ・・・。

運命なの・・・。

辛いけど・・・。

もうすぐ秋、いよいよ駅伝のシーズンがやってくる。

ヒロは駅伝チームで花の１区を任されていた。

通常１年からレギュラーポジションを得ることは至難の業であった。

しかし、中学時代から陸連の注目の的であったヒロは、今回大抜擢でレギュラーの座を獲得したのである。

それだけに、ヒロは練習にも熱が入っていた。

当然、千恵子の思いも同じである。もちろんヒロだけでなく、他の選手達も精一杯サポートした。

だが、千恵子は練習が終わった後もノンビリしている訳にはいかない。

チーム遠征での自分の旅費を稼ぐために、練習が終わると学校からバイト先に直行していた。

働ける時間が少ないために、お金はなかなか貯まらないが、どうしても冬の前までに５万円は貯金しておきたかった。

そして、その目標を達成したなら、今のバイトは辞めて他のバイトを探すつもりであった。

と言うのも、このバイト先の店長は通称『セクハラ親父』と呼ばれていて、バイト仲間の女子達から嫌われていた。

千恵子も店長にボディタッチをされた経験があるが、その瞬間は背筋がゾーッとする思いだった。

ただ、時給は割と良いので、今年は我慢して貯金に励むしかないのだ。

もうあまり期間が無い。贅沢は言っていられないのである・・・。

「ちょっと、千恵子」

「何ですか？」

バイトの先輩、恵理子がバイト帰りに話しかけてきた。

「最近、千恵子は触られた？」

「え？」

「セクハラ親父に」

「ああ、今週は今のところ無事ですね」

「私も。・・・なんか変な噂が立ってるんだけど千恵子も知ってる？」

「噂？」

「うん。あの昼間のおばちゃんと」

恵理子が言っている昼間のおばちゃんというのは夕方まで勤務しているパート主婦のことだ。

千恵子と入れ違いで帰るので、挨拶くらいしか面識が無かった。

「店長と付き合ってるらしいわよ」

「えっ？　でも店長は奥さんが居るんじゃ？」

「うん、いわゆる不倫ってやつだよ」

「不倫・・・」

千恵子には信じられない思いであった。店長も主婦も、お互いに家庭を持っているのに、何故そんな危険な関係を持つ必要があるのだろうか。

千恵子にとってみれば、平和な家庭を持つことが夢であった。

２人はそれを手に入れたのに、今度はそれを壊すかもしれない不倫に手を染めるなど、愚の骨頂

としか思えなかった。

「私、ここ辞めようと思ってるんだ。もう嫌だよこんなトコ」

「先輩・・・」

「だけど、残った千恵子達のことがチョット心配なんだ・・・」

「・・・・・・・」

「私は明日で辞めるつもりだから、店長とおばちゃんに爆弾投げつけてやるね。見てて」

恵理子は不敵な笑みを浮かべていた。

翌日、千恵子がバイト先に入ったのを見届けた恵理子は昨夜の件を実行に移した。

店に客が居ないのを確認すると恵理子は店の全員に向かって話し始めた。

「店長、みなさん、今までお世話になりました。私は今日で終わりです」

みんなから一斉に拍手が起きた。

「最近少しお客様が増えてきてるから、私の代わりが入るまで忙しいかもしれませんけど、勘弁してくださいね」

勤務が終わり、帰りかけていた例の主婦が口を開いた。

「残念ねー、でもどうして急に辞めることになったの？　男でも出来たかな？」

主婦は口元に卑猥な笑みを浮かべた。そして店長の顔にも主婦と同じように厭らしい笑みが浮かんでいた。

「私・・・彼氏は居ないけど、もし出来たら絶対浮気はしないって決めてるの。浮気なんて許せない。不倫なんか絶対に許せない」

その場の全員の顔が一瞬凍りついた。いや、店長と主婦以外は。

肝心の店長と主婦は、まだ恵理子が何を言おうとしているのか分かっていなかった。

恵理子は噂の出元である同じ職場の男子大学生から情報を聞き出していたのだ。

「今週の月曜日、店長と畑中さんがラブホテルから出てきたところを目撃しちゃった人がいるんです。私、そういうの許せないの」

「な、何？　そ、それはその・・・」

急に店長がソワソワして言い訳を始めた。主婦も顔面蒼白である。

「お２人ともご家族が居るのに、そんな不潔なことしていいんですか？」

「わ、私、帰ってご飯の支度をしなきゃ・・・」

主婦、畑中慶子は肝心な事には何も答えず慌てて店を出て行った。

「お、大人には大人の事情ってものがあって、お前達のような子供には分からないんだ」

「ふーん。そうなんだ。それじゃ大人は大人同士でやってもらって、子供の私達のお尻を触るのも止めてもらえます？」

その場に居合わせたバイトの全員が、下を向いて笑いを堪えていた。

千恵子も、内心では恵理子の強かさに舌を巻いていた。そして恵理子を心の中で応援した。

「お、俺はそんなことしたことないぞ・・・」

「私達女子全員が店長に体を触られて嫌な思いをしてるんです。もうそんなこと止めて下さい。止めないんなら畑中さんとのこと、畑中さんの旦那さんに言いつけるから」

「わ、わかった」

もう店長は認めるしかなかった。そしてこの１件以来、店長からのセクハラ被害は無くなった。

とりあえずは千恵子も安心して働けるようになったわけである。

しかし、店長に対する不潔な印象は拭えず、その後も女子は１人また１人と辞めていった。

いよいよヒロのデビュー戦の日がやってきた。　市内の国道を使っての駅伝レースである。

我がチームは春から夏にかけての猛練習の甲斐があって、その実力は相当なものがあった。

現在の下馬評では、優勝は青葉台高校で準優勝が我が校であろうとのことであるが、もちろん青葉台に負ける訳にはいかなかった。

ウォーミングアップをしていると、青葉台に進み駅伝部に入ったヒロの親友柏原がやってきた。

「よう！　ヒロ。今日は負けないぞ」

「こっちこそ、絶対優勝は頂くぜ！」

ニコヤカに挨拶を交し合うと柏原は自分のチームに戻っていった。

千恵子は少し複雑な思いでそのやり取りを聞いていた。本当であれば２人は青葉台のチームメイトとなる筈だったのだ。

千恵子のために、青葉台を諦めたヒロに対して改めて申し訳なさがこみ上げてくる。

しかし、当のヒロは元気満々である。

「チコ、何をボケッとしてんだよ。もうすぐスタートだぞ！」

「あ、はい、ごめん」

そうだ、今は余計な事を考えている時ではない。レースに集中するのだ。

スタート５分前、各校の選手達が続々と集まってきた。その数１８名、もちろんその中にはヒロの姿もあった。

「頑張ってー！」

千恵子は祈るようにして叫んだ。

「位置に付いて！」

審判の声が響いた。

パーーーン！

スタートピストルの音が辺りの空気を切り裂いた。

１区の選手達は弾かれたように走り出す。少しでも良いポジションに付くため、お互いがしのぎを削る闘いが始まった。

ヒロは前から４番目だが集団の中に囲まれてしまって身動きが取れないようだった。

「ヒローーー！」

もう千恵子は声援を送ることしかできない。　しかも今回のコースは周回ではなく往復となっていたため、間もなく選手達の姿はスタート地点からは見えなくなってしまった。

千恵子は顧問の先生の車に乗り込み、２区との中継地点へと急いだ。

その途中で選手の一団を追い越す時には、千恵子は窓から身を乗り出すようにしてヒロに声援を送った。

ヒロは必死の形相で前を行く他校の選手に付いて行こうとしていた。

このまま併走して応援していたかったが、それは出来ないのだ。

後ろ髪を引かれる思いで中継地点に向かった。

１区の距離は１０キロである。現在選手達は３キロ地点にいる。あと２０数分もすれば中継地点に到達する筈だ。

ヒロは何位でタスキを渡せるのだろうか。

ヒロがデビュー戦を満足のいく形で終わらせて欲しい。その時千恵子はそればかりを考えていた。

中継地点に着いた千恵子は急いでヒロの受け入れ準備を始めた。

２区の受け持ちは３年の田端である。もう準備万端整えて、今や遅しとヒロの到着を待ち構えていた。

しかし、

予定の時間を過ぎても選手達がやってこない。

中継地点は次第にざわめきだしてきた。

その時、審判の１人が慌てて飛び込んできた。

「事故だ！　７キロ地点で交通事故が起きた！」

それを聞いて千恵子は真っ青になった。

体がガクガクと震える。

とにかく顧問の車に飛び乗ると７キロ地点に向かった。

「先生、ヒロは、ヒロは大丈夫でしょうか？」

「慌てるな加藤、きっと大丈夫だ。心配するな」

そう言いつつも顧問のハンドルを握る手は小刻みに震えていた。

事故現場は凄惨な状況となっていた。

１８人の選手のうち８人が事故に巻き込まれ、残りの１０人もレースを棄権してケガ人の介護のために奔走していた。

ヒロは？

千恵子は必死になってヒロの姿を探し求めた。

居た！

道路脇に仰向けに寝かせられて審判や他校の選手がヒロを看護していた。

「ヒロ！　大丈夫？」

「チコ・・・足をやられた・・・」

見ると左足の太股の辺りが紫色になっていた。しかも足の形が崩れているのだ。明らかに骨折しているのが分かった。

「ヒロ、ヒロ」

千恵子は涙が出て止まらなかった。

「大丈夫だ、チコ。心配するな。ちょっと骨が折れただけだよ。審判、他の選手は？」

「あ？　ああ、ほとんどの選手が軽症らしいが、三高の選手だけは意識が無いようだ」

「マジですか？　大丈夫かなぁ・・・」

ヒロは自分の事より、他校の選手の心配をしているのだ。

怪我をしたとはいえ、思ったより元気なヒロの姿を見て一安心した千恵子は、改めてヒロの偉さを思い知った。

間もなく、救急車が１台また１台と到着して、怪我をした選手達を病院へ搬送していった。

ヒロも２台目の救急車に乗せられて市民病院に向かった。もちろん千恵子も同乗した。

その後の現場検証により事故は飲酒運転による暴走で引き起こされたものだと分かった。

事故後、意識の無かった三高の選手は残念ながら亡くなったそうだ。

ヒロは病院で手術を受けて、そのまま入院することになった。

事故の報を聞いて、急いで駆けつけたヒロの両親には顧問の先生から事情が説明された。

「チコちゃん・・・付いていてくれたのね。ありがとう」

ヒロの母親が涙ながらにチコを抱き寄せた。

それで、今までの緊張が一気に解けて、千恵子もボロボロと涙をこぼして泣いた。

とにかく命に別状は無かったのだ。それが何よりだったのだ。

しかし、ヒロはまた走れるようになるのだろうか？

麻酔で眠っているヒロの顔を見ながら、何とか元通りの体に戻ってくれることを祈る千恵子であった。

ヒロの怪我による休部に伴い、千恵子もヒロの看護を願い出て、同じ期間休部することにした。

千恵子は毎日授業が終わると真っ直ぐ病院に向かった。

そして、付き添いが許される１９時まではヒロの側を離れずに面倒をみていた。

「お兄ちゃんは幸せ者だよな。こんなカワイ子ちゃんに毎日看病されて。俺なんか誰も来てくれねえや、ワッハッハ！」

同じ病室の中年の患者には、こうしてよくからかわれたが、千恵子にとってはそれも嬉しかった。

クラブでヒロの姿を追いかけるのも幸せだったが、今はすぐ側に居て面倒をみてやることが出来るのだから千恵子にはまるで夢のようであった。

りんごの皮を剥いてやったり、学校の勉強内容を伝えたりする、その１つ１つがかけがえの無い時間であった。

そして全治３ヶ月と言われた怪我も、驚くほどの回復力で２ヶ月を過ぎたところで退院が許可されたのだった。

これからは通学も出来るが、やはり放課後は病院に行ってリハビリを受けなければならなかった。

もちろん学校の行き帰りも病院のリハビリも千恵子が付き添った。

約２ヶ月間、ベッドに寝たきりだったヒロにとって、リハビリのメニューはかなりキツイものであったが、１日でも早いクラブ復帰に向けて必死で取り組んでいた。

そして駅伝シーズンを棒にふってしまったが、春を迎える頃には、何とか軽い練習を再開できるまでになっていた。

そして２年に進級したある日、授業を終えた千恵子とヒロが一緒に学校の校門を出た時である。

「千恵子」

それは柿沼であった。母のヒモの柿沼が車で校門前まで来ていたのだ。千恵子の表情が暗くなった。

「よう、兄ちゃん。千恵子を借りていいか？」

「は、はあ」

千恵子は一瞬だけヒロを悲しそうな目で見つめた後、目を伏せて柿沼の車の助手席に乗り込んだ。

あああ・・・。

もうだめ。

ああ・・・。

助けて・・・。

ああ。

ああ。

このまま私は堕ちていくのかしら・・・。

ああ。

ああ。

千恵子は自分の部屋のベッドの上で白い全裸の体を横たえていた。

その上には、全裸の柿沼が覆い被さっている。

左の乳房は柿沼の右掌によって鷲掴みにされ、右の乳首は柿沼の舌で舐め回されていた。

さらに柿沼の左手は千恵子の脇から背中にかけての一番敏感な部分を巧みに愛撫し続けていた。

千恵子は両足を大きく開かれ、その秘密の蜜壷は柿沼の大きく硬いモノによって貫かれていた。

溢れるほどの愛液と柔らかい陰唇が柿沼の猛り狂った肉棒に絡みつく。

そして柿沼の腰がゆっくりと前後に動き、それに合わせて千恵子の口から切ない喘ぎ声が漏れ続けた。

あ、

あ、

あ、

あ、

あ、

ああーーー！

柿沼の動きが次第に早くなっていく。

やがて、千恵子は絶頂を迎えた。

い、いいーーー！

決して口にしてはいけない言葉を吐き、そのまま千恵子は気を失った。

この関係は中学２年の夏から始まっていた。

柿沼は母親だけでは飽き足らずに娘の千恵子にまでその魔手を伸ばしたのだ。

初めてレイプされた時、千恵子は必死で抵抗したが、到底男の力には敵わず、無残にも体を奪われてしまったのだ。

しかも、この男は卑怯なことに千恵子の母親に対する愛情を逆手に取って脅迫した。

「もしお前がこの事を母親に話せば、お前の母親はきっと自殺するぜ」

これによって、千恵子は誰にも助けを求める術を失ってしまったのだ。

たった１人の肉親である母親の自殺など、千恵子にとっては想像するだけでも恐ろしいことであった。

こうして無抵抗となった千恵子は、中学を卒業するまでの間、頻繁に柿沼の性的虐待を受け続けてきた。

しかし、高校入学以来、平日は家に帰る時間が遅くなったことで、柿沼の餌食とされる回数は減っていた。

だが、年を重ねる毎に大人になっていく千恵子の体を柿沼はいつも狙っていたのだ。

そして、母親がたまに休日の出勤であったりすると、千恵子は柿沼の命令で家に居ることを強要され、相手をさせられていた。

中学時代と比べて回数が減った分、柿沼のセックスは執拗になっていた。

もともと母親を虜にしたほどの性技の持ち主である柿沼の愛撫は、千恵子の心とは裏腹にその体を次第に蝕んでいった。

もはや千恵子の体は完全に柿沼のセックスの虜となっていたのだ。

「ちょっと・・・何してるの・・・あんた・・・千恵子」

母親の声がヒステリックに響いた。

未だ絶頂の余韻から覚めずに柿沼の腕の中でまどろんでいた千恵子は、一瞬のうちに事態を悟った。

「何だ、もう帰ってきたのかよ・・・」

柿沼は悪びれもせずに言った。しかし千恵子はあまりのことに気が遠くなりそうだった。

「あんたって奴は、千恵子に何をした？」

母親は体中をワナワナと震わせて、今にも柿沼に掴みかからんばかりだった。

「何をしたって、見てのとおりだ。こいつガキのくせに母親ゆずりのヨガリ方でよ」

「出てけ！　今すぐこの家から出てけ！　もう死んじまえ！」

母親はもう半狂乱で柿沼を千恵子から引き離すと殴りつけ、千恵子の部屋から追い出した。

「へっ、分かったよ。出てってやるよ。後になって俺の体が恋しくなって探しても無駄だぜ」

「バカ野郎！　二度と私達の前に姿を現すな！」

間もなく柿沼は車で出て行った。

母親は呆然としていた。そして千恵子はただ泣き続けていた。

「千恵子・・・ごめんなさい。あなたを酷い目に遭わせて・・・」

母親は泣きながら千恵子に謝りつづけた。

「お母さんが、あんな男に騙されていたせいで」

「お母さん！」

千恵子は母親に抱き付き声をあげて泣き出した。

「お母さん、ごめんなさい、ごめんなさい」

「千恵子は悪くない、悪くないのよ・・・」

母親は全裸の千恵子の体に自分のカーディガンをかけると優しく抱しめてくれた。

これで、やっと悪夢のような生活から逃れることができたのだ。

もう、あんな男に体を弄ばれることはないのだ。

お金を吸い取られることも無くなるのだ。

そして、やっと人並みに暮らしができるようになるのだ。

何か憑き物が落ちたように、千恵子は体が軽くなるような気持ちだった。

自分は救われた。

しかし、母親は・・・。

気持ちの支えだった柿沼に裏切られていたことを知った母親の心はどうなんだろう。

昔、柿沼が言った一言が千恵子の脳裏に響き渡っていた。

お前の母親はきっと自殺するぜ。

自殺するぜ。

自殺・・・。

この時、千恵子は新たな恐怖が芽生え始めたことを知ったのである。

千恵子は母親が柿沼を本当に愛していたことを知っていた。

しかし、母親は自分より年下の柿沼が、いつか自分を捨てて若い女の許に行ってしまうのではないかという恐怖感を持っていたことまでは知らなかった。

母親は、どんなに仕事で疲れていても柿沼のセックスの誘いは断らなかった。

千恵子は夜な夜な母親の寝室から聞こえてくる、母親の淫らな声に何度フトンを被り耳を塞いだことであろう。

柿沼は異常性欲の持ち主だったのである。

そして母親は、どんなに柿沼に金を無心されても決して断ることは無かった。

それは自分が人の２倍３倍働いて、お金を貢ぎ続けることが柿沼を繋ぎとめる唯一の方法だと信じていたからだった。

だが、それは最悪の形で裏切られることになったのだ。

その日以来、母親は仕事から帰ると酒を飲むようになった。それも、酔いつぶれるまで飲むのだ。

きっと忘れてしまいたい事が多すぎるのだ。千恵子は母親が可哀想でならなかった。

そして、また体を壊すのではないかと気が気でなかった。

気のせいか、母親が前より痩せてきたように見えた。

柿沼が出て行ってから３ヶ月が経とうとしていたある日の朝のこと。

千恵子はテレビのニュースに釘付けとなった。

柿沼が死んだのだ。それも他殺体で発見されたというニュースであった。

出勤の支度をしていた母親がそのニュースを聞くや、その場に倒れ込んでしまった。

「お母さん！」

母親は完全に気を失っていた。

「お母さん、しっかりしてよ！　お母さん！」

やはり母親は立ち直れていなかったのだ。

最近めっきり白髪が増えて、体も痩せ細ってきたが、精神的にもギリギリのところまで追い込まれていたのだろう。

自分と娘を酷い目に遭わせて、憎くて堪らない相手の筈なのに、母親の中では葛藤があったに違いない。

男と女の仲というのは本当に複雑で混沌としているのだ。

千恵子は母を看るため学校を休んだ。

何を話しかけても、母親は応えてくれなかった。

フトンの中で、ただ虚ろな視線を天井に向けて横になっているだけであった。

千恵子の不安は増幅していった。

朝方、まだ夜も明けきらぬ時間であった。

自分の部屋に戻り仮眠を取っていた千恵子は何かの物音で目を覚ました。

今の音は何かしら？

まさか・・・泥棒？

千恵子は恐怖心に襲われたが、母親を守らなくてはと決意し、恐々部屋を抜け出した。

しかし、そこで千恵子が見たものは、想像を絶する光景であった。

母親は階段の手すりに紐をかけ、首吊り自殺を遂げていたのである。

ぬくもり

千恵子はそれからの記憶を失っていた。

母親の葬儀を終えて、千恵子は１人自分のベッドに横たわっていた。

何が起きたのか・・・。

私の身に何が・・・。

私はどこに行くの？

母親の最後の姿が瞼の裏に甦った。

「いやーーーーー！」

千恵子は突然半狂乱に陥った。

「おい！　チコ！」

ヒロが部屋に飛び込んできた。

「チコ、しっかりしろ。大丈夫か？」

千恵子はもう何が何だか分からなかった。ただベッドの上で泣き叫び、ヒロの胸をこぶしで何度も叩いた。

「チコ・・・」

ヒロは千恵子のなすがままに任せた。　今の自分には千恵子を正気に戻す術はなかった。　ただ出来ることは、千恵子を見守ることだけであった。

部屋の入り口には、ヒロの両親が立ち尽くしていた。千恵子の身に降りかかった、あまりの運命の過酷さに、何と声をかけて良いものか迷っていたのだった。

しかし、天涯孤独の身となった千恵子を支えられるのは彼らしかいなかったのである。

その日の夜から、千恵子はヒロの家に引き取られることになった。

今の千恵子を１人にするのは、あまりに危険であった。

母親の後を追ってしまう危険を誰もが感じていたのである。

「おじさん、おばさん、ヒロ、ご迷惑をおかけして申し訳ありません。イロイロとありがとうございました」

涙も涸れ果てた千恵子は今や生ける屍のようであった。

虚ろな視線を彷徨わせながら、それでも千恵子は彼らに感謝の気持ちを伝えた。

「チコちゃん。今日からはおじさんの家の家族になるんだ。おじさん達がチコちゃんを支えていくから、チコちゃんも今の悲しみを何とか乗り越えて欲しい・・・」

「おばさんに、うんと甘えてね。おばさんはチコちゃんのことを前から娘のように思ってたんだから・・・」

千恵子の目に新たな涙の滴が浮かんだ。

「チコ・・・お前、小さい頃、俺によく言ってたよな。大きくなったら俺の嫁さんになるって」

「えっ？」

「忘れちゃったのか？」

「そんな・・・忘れるわけがないよ・・・１日だって忘れたことない」

「こんな時に何だけど・・・」

「えっ？」

「俺は・・・」

「俺は・・・チコのことが好きだ。俺は将来チコと結婚したい」

「・・・ホント？」

「ああ、ホントだ」

ヒロは真っ赤な顔をしていた。

「チコちゃんさえ良かったら、おじさんもヒロのお嫁さんに来て欲しいと思っているよ」

「おばさんもよ」

「私でいいの？」

「チコじゃなきゃ駄目なんだ」

「だけど、お前たちはまだ高校生だからな。少なくても大学を卒業するまでの間は結婚はお預けだぞ」

「あら、お父さん、学生結婚でも良いじゃありませんか？」

「うーん・・・それは・・・まあ、将来のことはその時に考えるとして・・・」

「あ、父さん逃げた」

「ば、ばかもん！」

この時、やっと千恵子の表情が緩んだ。

もちろん悲しみが癒えたわけではない。しかし、自分にはこれ程までに心配し、そして愛してくれる人達が居ることに気付いたのである。

「ありがとう・・・本当にありがとう」

千恵子の目に浮かんだ涙は、もはや悲しみの涙ではなくなっていた。

ヒロの家での生活は、忘れていた家庭の温もりを思い出させてくれた。

父親が生きていた頃もこんな風だった。そんなセンチな気分になって落ち込むこともあったが、ヒロ達とのふれあいがそんな気分を吹き飛ばしてくれた。

本当に何年ぶりかで、心から安心して暮らすことができたのだ。

そして、クラスの友達やクラブの仲間達は、そんな千恵子とヒロのことを心から認め、祝福してくれたのだった。

まるで『高校生夫婦』といった受け止め方をされていたようであった。

クラスでは、ヒロのことは『旦那』、千恵子のことは『奥さん』という新しいあだ名が付いたのは言うまでもない。

ヒロはテレまくっていたが、千恵子はそのあだ名さえも嬉しかった。

しかし、もちろん高校生らしい清い交際に終始していたのは当然である。

千恵子は体の関係よりも大切なものが何かを十分過ぎるほどに分かっていたのだ。

ちなみに柿沼であるが、ヤクザの女に手を出したことが原因で殺されたということであった。

柿沼らしい死に様であったということであろう。

運命の歯車

また秋が近づいていた。そして今年のシーズンにかけるヒロの意気込みはもの凄かった。

昨シーズンはアクシデントで棒にふったが、そのおかげでヒロと千恵子は心と心をしっかり結ぶことができた。

そしてヒロは千恵子のためにも今年こそは確実にトップの成績を狙うつもりでいた。

もちろん千恵子も同じ気持ちである。マネージャーとしてはもちろんのこと、ヒロのベターハーフとして、自分の出来る限りのサポートを続けていた。

そんなある日曜日のことであった。

クラブの練習は午前中で終わり、ヒロを含む選手達は疲労回復のため、近所にあるスポーツクラブのジャグジー施設に出かけていた。

普段は選手達と行動を共にする千恵子であるが、この日ばかりはそういう訳にもいかなかった。

クラブの予算の都合があり、施設を利用できるのは選手だけに制限されてしまったのである。

しかし、千恵子にしてみれば別に不満がある訳でもない。むしろ、不意に訪れた休暇のような気分だった。

マネージャーというのは意外に気を遣うので結構疲れる仕事なのである。

それが、日曜の昼過ぎにクラブ公認のフリータイムをもらえたのだから、千恵子としては大いに息抜きをするつもりでいたのだった。

まず千恵子は街の大通りに行ってブラブラと歩いてみた。

別に何の目的がある訳でもない。ただ他の女の子達がするように、ウィンドウショッピングをしたり、コーヒーショップで買ったドリンクを飲んだり、そんな他愛も無いことが千恵子には楽しかったのだ。

これが普通の女子高生の休日の過ごし方なのかもしれないな・・・そんなことを考えたりすると、今までの自分が余りにも杓子定規な日々を送っていたようで、なんだか可笑しかった。

しばらくはそんな風にして過ごしていたが、さすがに手持ち無沙汰を感じたので、家に帰ることにした。

いつものように、おばさんとおしゃべりでもしながらヒロの帰りを待っていようと思い立ったのである。

不意に嫁と姑という言葉が脳裏に浮かんだ。

そんなのまだ早いよ。

千恵子は可笑しかった。

しかし、何だか分からないけれども楽しかった。

心が弾んで、家路を急ぐ千恵子の足取りは軽かった。

神社の裏手の細道を歩いている時だった。

後ろから静かに近づいてきた車が千恵子の横で停車した。白いワンボックスタイプの乗用車であった。

左サイドのスライドドアが開いて、中から青年が声をかけてきた。

「すみませーん。ちょっと道に迷っちゃって」

「道を教えてもらってもいいですか？」

「あ、はい、私に分かるかなー」

千恵子は何の警戒もせずに車に近寄った。

その瞬間、車の中から伸びた手が千恵子の体に絡みついた。

「えっ！　何？」

そのまま千恵子は、あっという間に車の中に引きずり込まれた。サイドドアが急いで閉められる。

「いやっ、何なの？」

車の中には５人の男達が乗っていた。

運転していた男以外の４人が千恵子の体をシートにうつ伏せになるように押えつけた。

「いやー、やめて！」

１人の男が千恵子の口を手で塞いだ。声が出せない。苦しい。

外は見えず、車がどこに向かっているのか全く分からなかった。

千恵子は、ただ恐怖に震え、抵抗する気力も失せていた。

車はしばらく走った後で停車した。多分、拉致された時からは少なくとも１時間以上が経過していたと思われた。

車から引きずり出されて千恵子が見たのは、山林と古い山小屋らしき建物であった。

「ここはどこ？　あなた達は誰なの？」

男達は不敵な笑みを浮かべていた。そして千恵子はその建物に連れ込まれた。

その小屋の中で、千恵子は５人の男達によって代わる代わる、２時間あまりも繰り返し陵辱され続けた。

それは千恵子にとって永遠にも感じられる長い時間であった。

不意に死んだ柿沼の厭らしい顔が浮かんだ。

どうして？

私が何をしたの？

誰か助けて・・・。

いや。

やめて。

酷すぎる。

これが私の運命なの？

ああ・・・。

もう駄目・・・。

無性に涙が出た。

しかし、自分の意思とは裏腹に下半身には痺れるような快感が湧き起こり、千恵子の蜜壷は次第にタップリの愛液を溢れさせていった。

今や千恵子はその快感に身を委ねて、淫らなヨガリ声を出し始めていた。

そして男達に犯されながら、千恵子は思考を停止した。

ヒロは学校のそばまで千恵子を探しに来ていた。そして不安に苛まれていた。

この時間まで千恵子が帰ってこないなんて今までに無かったことだ。

もう外は暗闇に包まれている。

おかしい。

もしや千恵子の身に何かあったのではないか。

ヒロの両親も心配して探しに出ていた。今や娘、いや嫁も同然の千恵子のことが心配で、居ても立っても居られなかったのだ。

ヒロは千恵子がいつも利用する通学路を通ってみた。何か手がかりになるものはないか？

クラスの友達のところにでも行っているのだろうか？

それにしても、この時間まで何の連絡も無いのはおかしい。

１人１人に連絡を取ってみた方が良いかもしれない。家に着いたら、とりあえず電話をしてみようと思った。

やがてヒロは神社に向かう細道に出ていた。

するとそこに白いワンボックスの乗用車が停まっている。

何気なくその車を見ながら近寄っていくと、突然サイドドアが開いて誰かが放り出された。しかし暗くて誰かは分からない。

「あばよ！　今夜は気持ちよくオネンネしなよ。アッハッハ」

車の中の男達が、その放り出された人物に捨て台詞を吐いて車を発進させた。

こっちの方に向かってくる。すれ違いざまに運転手の顔を見た。

あいつは・・・確か。

今の男は見覚えがある。確か町のチンピラだ。前に街中でケンカを売っているのを目撃したこと

がある。

悪い予感がして、ヒロは放り出されてうずくまっている人に駆け寄った。

道端に倒れ込んで泣いているのは、紛れも無く千恵子であった。

「チコ！」

抱き起こした。

「ヒロ・・・」

「何をされたんだ」

「私、もう・・・」

それ以上話すのは無理であった。しかし、ヒロは全てを悟った。

「くそっ！　あいつら殺してやる」

ヒロは千恵子を背負うと家に向かった。家の前には母親が立って待っていた。

「ヒロ、チコちゃん無事だったの？」

「母さん、とにかく家に入ろう・・・」

応接間で、千恵子は泣き続けていた。

間もなく父親も帰ってきた。

しかし、汚れて乱れた制服姿の千恵子を見て、父親も母親も千恵子の身に起きた悲劇を悟った。

父親が苦しげに声を絞り出した。

「お母さん、チコちゃんをお風呂に入れてあげなさい」

母親と千恵子が部屋を出て行った。

「警察に連絡しよう」

「父さん、そんなことしたらチコは・・・」

「傷つく・・・しかしこれは犯罪だ。犯人を野放しにしてはおけない」

父親は拳を握り締めていた。

「私は今から警察に行ってくる。ヒロはチコちゃんのそばに居てやりなさい・・・。いや、今夜は母さんに任せた方がいいかもしれん」

父親は出かけていった。

ヒロはハラワタが煮えくり返る思いでジッとしてはいられなかった。

そしてヒロも家を飛び出した。

ヒロは街に出た。犯人のチンピラ達の居場所を突き止めて警察に突き出してやるのだ。だがその前にコテンパンに叩きのめしてやらないと気がすまなかった。

ヒロは街中を当てもなく探し続けた。

そして、街外れにある倉庫街の隅に停まっている白いワンボックスを見つけた。

車の停めてある脇の倉庫は古く、もう使われていないようだった。チンピラ共のいい根城になっているのだろう。

ヒロは半開きの鉄の扉から倉庫の中に入っていった。

やはり、やつらはそこに居た。

リーダー格らしい男が立てたドラム缶の上に胡坐をかいて座っている。　車を運転していた男だ。　そして、その周りの木箱や古タイヤには４人の子分らしい男達が座っていた。　酒を飲んでいるらしい。　そして猥談に花を咲かせていた。

くそっ、あいつら絶対に許せん。ヒロは男達の前に飛び出した。

「てめえら、チコに酷いことしやがって。ぶっ殺してやる！」

「あー？　なんだテメエは？」

リーダー格の男はノンビリした口調で言った。

周りの子分達は、ニヤニヤしながらヒロを見て言った。

「ほら、あれですよ。今日のアヘアヘ言ってた女のことですよ」

「そうそう、なかなか具合のいい女だったな。ゲヘヘヘッ」

「黙れ！　貴様ら！」

ヒロは今にも飛び掛らんばかりの勢いだった。

リーダー格の男がまた口を開いた。

「テメエの彼女だったって訳か？　そりゃ、失敬したな」

「ふざけるな！」

リーダー格の男は、ヒロをからかうような口調で続けた。

「てっきり処女だと思ったのに期待が外れたが、テメエがあそこまで仕込んでたって訳か」

「何？」

「あの女、俺らにやられながら、タップリとあそこを濡らして、随分よがってやがったぜ」

「そんなの嘘だ！」

「嘘じゃねえよ。なんだテメエが仕込んだんじゃねえのか。それじゃ他の男と随分楽しんでた女だったってことか」

「やめろ！」

「テメエも楽しませてもらった方がいいんじゃねえのか？　ハハハ」

「この野郎！」

ヒロはリーダー格の男に殴りかかった。

しかし、その拳が届く前に子分どものパンチやキックが雨あられと降り注いできた。

ヒロは完全に激高して滅茶苦茶にパンチを繰り出した。それが子分どもにも当たり出し、だんだんと彼らは本気になってきていた。

「このガキ、こっちが手加減してればイイ気になりやがって」

「兄ちゃん、海の底に沈めてやろうか？」

ヒロはますます大暴れを始めた。

「こいつ面倒くせえ、やっちまえ」

ヒロの胸元に白い光が走った。

ドヒュッ！

子分の１人が突き出したナイフの刃が、ヒロの胸に突き刺さった。

「あっ、バカ野郎。マジで刺すやつがあるか。やべえぞ、逃げろ！」

リーダー格の男が慌てて逃げ出した。それを追いかけるように子分どもも逃げ去っていった。

「チ・・・コ・・・」

ヒロはその場に倒れ込んだ。胸からは激しく血が噴き出し、みるみるうちに床に広がっていった。

卒業

無残なヒロの死体が発見されたのは翌日だった。

ヒロの両親の嘆きは深かった。

そして、千恵子はその悲しみのあまりの深さに起き上がることさえ出来なくなっていた。

現場の遺留品から犯人達はすぐに逮捕されたが、そんなことは何の救いにもならなかった。

私のせいだ・・・。

私がヒロを死なせたんだ・・・。

私に関わる人達が次々に死んでいく。

私は・・・死神？

この世にいてはならない存在？

ならば私も死ぬしかない・・・。

警察からヒロの遺体が戻ってきた。

棺の中のヒロは、まるで生きているようだった。

今にもムックリと起き上がって「やあ、チコ」と声をかけてくれそうな気がした。

死んだなんて、嘘。

早く目を覚まして。

私をお嫁さんにしてくれるんじゃなかったの？

私を置いてどこに行くつもりなの？

ひとりにしないで。

いつも私のそばにいて。

千恵子はいつまでもヒロの棺に寄り添っていた。

もう何も考えたくなかった。

ただ、ヒロのそばに行きたかった。

このままヒロと一緒に天国に行きたかった。

夜の闇に紛れて千恵子は家を抜け出した。

夢遊病者のように、千恵子はフラフラと彷徨い歩いた。

そして、辿り着いた所は高速道路の上に架かる橋の上だった。

すぐ下を絶え間なく車が走り抜けて行く。

その車のヘッドライトが描く光の筋がとても美しかった。

まるで天国へ続く道のように思えた。

千恵子は、ゆっくりと橋の欄干に手をかけた。

そのまま体を半分ほど外に出して、下を流れる光の筋をうっとりとした気持ちで眺めた。

さらに重心を外に移し、ズルズルと体が欄干の外に滑り落ちていった。

その時、

「チコちゃん！」

千恵子は後ろから強い力で橋の上に引き戻された。

「チコちゃん、こんなことをして、ヒロが喜ぶとでも思ってるのか！」

ヒロの父親であった。その後ろには母親の姿もあった。

「チコちゃん、お願いだからあなたまで遠くに行かないでちょうだい」

ヒロの母親はその場に泣き崩れた。

その姿を見て、千恵子は急に悲しみが押し寄せてきた。

「ヒーーローーーー！」

千恵子は天を仰いで泣き叫んだ。

「愛してるーー！　ずっとずっとヒロのこと愛してるーーー！」

ヒロの葬儀の後、千恵子はヒロの形見となった日記を受け取った。

ヒロの母親が言った。

「ヒロの全てをチコちゃんに分かって欲しいの。あの子がどれ程あなたのことを愛していたかを知って欲しいの」

千恵子は表紙を開いてみた。そして１ページずつ捲っていった。

「これ・・・」

千恵子の目から涙があふれ落ちた。

チコが笑っていた。

チコが泣いていた。

チコの顔色が悪かった。

チコが寂しそうだった。

チコが、チコが、チコが・・・。

全ての日のページに千恵子のことだけが書いてあった。

他の年の日記も開いてみた。全部同じだった。

ヒロが日記をつけ始めた中学１年の時から、毎日毎日ヒロは千恵子のことだけを日記に書き続けていたのだ。

そして、千恵子がヒロの家の一員となった日のページにはこんな風に書いてあった。

『チコ、やっとプロポーズできたよ。お前はいつも自信なさげだけど、お前が居てくれるから俺は頑張れるんだ。お前こそ俺の天使なんだ。唯一無二の大切な存在なんだ。俺は今日ここに誓う。チコを命を懸けて守り抜くことを。愛してるチコ』

その時、ヒロの声が聞こえたような気がした。

「チコ、生きろ！　俺の分まで精一杯生きてくれ！」

千恵子は日記を抱しめて泣いた。

「チコちゃん、大切な話があるんだ」

ヒロの父親が真剣な表情で話し始めた。

「ウチの娘になってくれないかね？」

「えっ？」

「今までも君のことは娘のように思ってきたんだけど、今度は正式に養女として迎えたいんだ」

「でも、私なんか・・・そんな資格ないです」

「家内もチコちゃんを実の娘にしたいと言っているんだよ」

「でも、でも・・・」

千恵子は嬉しかった。しかし、自分には秘密がある。ヒロにも知られていない淫らな秘密が。

そんな淫らで汚れた自分が養女になるなんて、申し訳がなかった。

そして、その秘密はヒロの父親や母親にも知られてはならないものであった。

それを知られたが最後、自分はこの家から追い出されてしまうに違いないと千恵子は思っていた。

「チコちゃん。君が何を気にしているか知らないが、資格がないなんてことはないんだ。おじさん達はヒロと同じようにチコちゃんを愛してる」

「そうよ、チコちゃん。おばさんの娘になってちょうだい」

「でも・・・」

これ程まで自分を信じてくれる人を騙すことはできない。

千恵子は全て話すことを決心した。

「おじさん、おばさん、実は私・・・」

全ての話を聞き終わった後で、ヒロの父親が言った。

「チコちゃん。随分辛い目に遭ってたんだね。でもこれからは大丈夫だ。おじさん達が命がけでチコちゃんを守るから」

「チコちゃん、おばさん達の気持ちは何も変わらないのよ」

「おじさん、おばさん、私で、ホントに私でいいんですか？」

ヒロの両親は深くうなずいた。千恵子はポロポロと涙をこぼした。

「よし、それじゃ決まりだな。早速手続きをしよう。そうそう、これからはおじさん、おばさんじゃなくて、お父さん、お母さんって呼ぶんだよ。いいね？」

「はい・・・お父さん」

「チコちゃん、私のことも呼んでちょうだい」

「お母さん」

信じられなかった。夢なら覚めないでと願いたい気持ちだった。

嬉しかった。

そして、心の中でヒロに謝った。

ごめんね、ヒロ。私、お父さんとお母さんを取っちゃった。

それを聞いて、千恵子の心の中に居るヒロは笑っていた。

「チコちゃん、君は将来何になりたいんだね？」

「私、何も決めてないんです」

「じゃ、ヒロは何を目指していたか知ってる？」

そういえば、そんな話をヒロとしたことは無かった。

「ヒロはね、私と同じ弁護士を目指していたんだよ」

「弁護士？」

「そう、弁護士だ。どうしてだと思う？」

「お父さんと同じ職業に就きたかったから？」

「うーん、そうなら嬉しいんだけど違うんだよ。実はヒロはね、児童福祉に関心があったらしいんだよ」

「児童福祉？」

「法律家の立場から児童相談所と協力して被害児童を無くしたいと考えていたんだ」

「すごい・・・」

「チコちゃんも興味を持った？」

「はい、それって私のような子供も対象なんですよね？」

「そうだね」

「それじゃ、私がヒロの後を継いで被害児童を無くしたい」

「よし、それじゃ私が応援してあげよう。一緒に頑張ってみるかい？」

「はい、頑張ります」

この時から千恵子の目標は決まった。

とりあえずは大学の法学部に入るのが直近の目標である。

そして、難関の司法試験も待ち構えている。

これから長い闘いになりそうである。

だが、千恵子はもう逃げることは止めたのだ。

今もヒロの声が聞こえる気がする。

「チコ、生きろ！　俺の分まで精一杯生きてくれ！」

もうすぐ、さまざまな思い出の詰まった高校生活も卒業する日がやってくる。

今の私はまだヒロに支えられて生きている。

しかし私が弁護士になってヒロの思いを継げた時こそ、本当にヒロから卒業することが出来るのだろう。

そして天国のヒロもそれを願っているに違いない。

きっと。